

陳舜臣さんを語る会通信

NO.23

Nov. 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

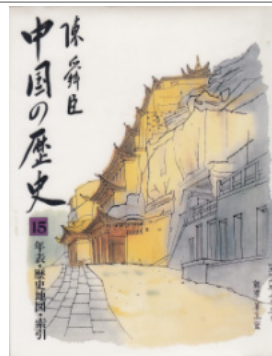
発行日 2020年11月1日

中国通史『中国の歴史』及び『中国の歴史 近・現代篇』

本号では、陳舜臣さんの中国通史2作品を取りあげました。ともに書き下ろしです。一つは、三皇五帝から民国誕生までを記述した『中国の歴史』全15巻(1980.11-83.6 平凡社)で、もう一つは、義和団前後から始まる『中国の歴史 近・現代篇』4巻(1986.12-1991.7 平凡社)です。

ところで、後者は、奥付裏の予告(下の画像)を見ると、当初、全13巻で、文化大革命も範囲に入っています。どうして、第4巻で打ち切られてしまったのでしょうか？これは、第4巻の刊行時期から考え、天安門事件も関係しているように思えます。

(編集委員 橘雄三)



第15巻表紙(平凡社)
挿画 平山郁夫

《 1. 『中国の歴史』執筆の動機 》

『中国の歴史 七』(1991 講談社文庫)「文庫版完結にあたってのあとがき」より引用します。

『史記』の作者司馬遷は、自分の生きた時代、すなわち漢の武帝の時代を書きたいために、さかのぼって、五帝紀から筆をおこしたといわれています。

刊行年	巻	各巻タイトル
1980	1	神話から歴史へ
1981	2	中華の揺籃
	3	大統一時代
	4	漢王朝の光と影
	5	動乱の群像
	6	世界帝国へ
	7	隋唐の興亡
1982	8	宋とその周辺
	9	草原からの疾風
	10	復興と明暗
	11	明から清へ
	12	清朝二百余年
1983	13	斜陽と黎明
	14	中華の躍進
	15	年表・地図・索引

(中略) 私の胸中に、司馬遷のことが、一種のわだかまりとなっていました。歴史は連続していて、流れているものです。ある一部だけを切り取ることにたいする不満—というより不安が強まってきました。

私が『中国の歴史』を書くことを思い立ったのはそのためでした。アヘン戦争から太平天国と、時代をくだって書き進めていたのが、こんどは

さかのぼってみなければならないとおもったのです。

《 2. 『中国の歴史 近・現代篇』途中打ち切りを惜しむ 》

『陳舜臣中国ライブラリー4』(2001 集英社)「自作の周辺」稲畑耕一郎氏との対談から引用します。

陳 四巻でストップしたんです。いろいろ事情があるんですけども、第一には、新しい資料が出て

くる時代になっていて、もうちょっと後にしたほうがいいという感じもあつたんです。

(中略)

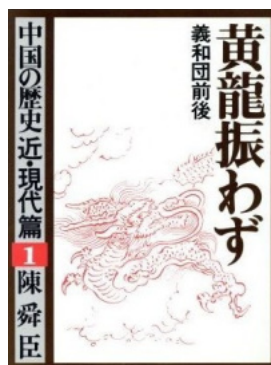
稲畑 重要な資料が隠されていたり、何か不都合なことがあって、口を閉ざさざるを得ないこともあるのでしょうか。

陳 そう。まだ公開されていない、だれかが握っている、あるいは気付かずにだれも調べようとしない資料、そういうものがどの時代における近・現代史の現場にも、ある。

私たちの今日でも、大分あると思います。例の文化大革命にしても、そうですね。(中略)まだ公開されていない資料とか、口を閉ざしている当事者というのは、まだまだあると思うんですよ。

だから、私が中国の現代史を書くというのは、ちょっと時間切れかな。まあ、あと十年ぐらいだから、間に合うかもしれない…。

残念ながら、間に合いませんでした。



←平凡社版 第1巻表紙

中国史理解の基礎知識

中国史理解の基礎知識

2018.6.23 橘雄三



■キーワード

- ①中原
- ②禅譲放伐
易姓革命
- ③華夷思想 ※胡
漢民族 ⇄ 西戎、北狄、南蛮、東夷
- ④漢字
- ⑤正史/十八史、二十四史、二十五史
司馬遷『史記』
曾先之(宋末・元初の人)『十八史略』
- ⑥儒学
四書/大学、中庸、論語、孟子
五経/易経、書経、詩経、春秋、礼記
- ⑦科挙

三皇
五帝

・古代中国の神話伝説時代の8人の帝王。三皇(諸説あり。伏羲ふつき・神農など)五帝(諸説あり。黄帝・堯ぎょう・舜など)。舜は、業績(黄河の治水など)・人物を見込んで、禹(う)に位を譲る。

・司馬遷(前145～前86)は五帝本紀を『史記』の最初においている。

・帝堯/四つの反対勢力を北狄・南蛮・西戎・東夷に変えた(『史記』)

夏

・禹が舜の**禅譲**を受けて位につき国を夏と号した。禹の姓は**姁**。夏は中国で国の名前をつけた最初。夏という字は、人が正面を向いて立った形。自分たちこそ「人間」であって世界の中心(「夏」は「華」に通じ、中華、華夏思想の原形)。農耕中心。

・二里头遺跡は夏墟？

・桀王/妹喜(ばつき) 肉山脯(干し肉)林、以酒為池、使可運舟(『帝王世紀』)



黄河の治水工事を指揮する禹

殷

・夏の諸侯の一人、湯(王)が桀王を討ち(**放伐**)、商を立てた。殷の姓は**子**。農業中心へ。

・商は殷の遠祖が最初に封じられた土地(地名)。

・前期、中期の都、河南省鄭州。晩期の都、河南省安陽の殷墟。

・殷墟 ■ 甲骨文字/漢字の原初形態、最古の祖形 → 金文 大篆 小篆 隸書 楷書

・占卜による神権政治

・紂王/妲己(だつき) 酒池肉林(『史記』)

周

殷の諸侯の一人、武(王)が、太公望(呂尚)を師とし、殷を滅ぼし(**放伐**)、周を立てた。周の姓は**姬**。周はもと、游牧民族らしい。のち、渭水盆地に定着して農耕生活にはいり、殷に支配されていた。

■西周/神権政治にかわる封建制で支配

犬戎侵入で西周(鎬京) ⇒ 東周(洛邑) ※幽王/褒姒(ほうじ)

■東周/周宗家の支配は有名無実

春秋時代 ……春秋の五覇(齊の桓公、晋の文公、楚の荘王、秦の穆公、宋の襄公)

最後2者に代え、呉王夫差、越王勾践を入れる場合も

戦国時代(晋の分裂BC403以降) ……戦国の七雄(秦・楚・燕・齊・韓・魏・趙)

・記録/史官による記録が残っている

・「中華」という概念、華夷思想が形を整えてくるのは春秋戦国時代。秦漢時代までに体系化。

・諸子百家/孔子(前551～前479)(儒家)、商鞅(法家)ほか

秦

周に仕え始めたころ、中原に住んでいたともいわれる。のち、秦(甘肅省東端部)に地を与えられ、やがて、陝西省岐山以西の地に封じられ諸侯に列せられた。この地で、付近の諸戎を征して西戎の覇者となった。戦国のはじめ、商鞅を登用、強国となる。中国史上初の中央集権国家。「秦の支配層は漢民族だ、いや西戎だ」等々、言われる。始皇帝の本名は**嬴**(えい)政。趙政とも。

・「中国」を「国つなか」ではなく「なかつ国」の意で用いるようになったのは秦の統一後(陳舜臣氏)。

漢

前202年に漢王朝を開く以前、**劉邦**は項羽により、漢中・巴・蜀の地に王として封ぜられ、漢王(漢中王の意)を名乗った。なお、漢中は漢水に由来。

武帝のとき、董仲舒の建言により五経博士が設置され、国教となったといわれている。

※儒学は南宋の朱子により宋学として大成。

南北朝

■北朝/ 拓跋(たくばつ)氏、宇文(うぶん)氏、高(こう)氏と、鮮卑系の王朝が続く。

■南朝/ 江南の開発進む

隋・唐

南北朝を統一した隋(**楊堅**)および、その後を再統一した唐(**李淵**)の皇統は五胡十六国・北朝系の末裔であったが、もはや彼らは漢民族に同化されていた。

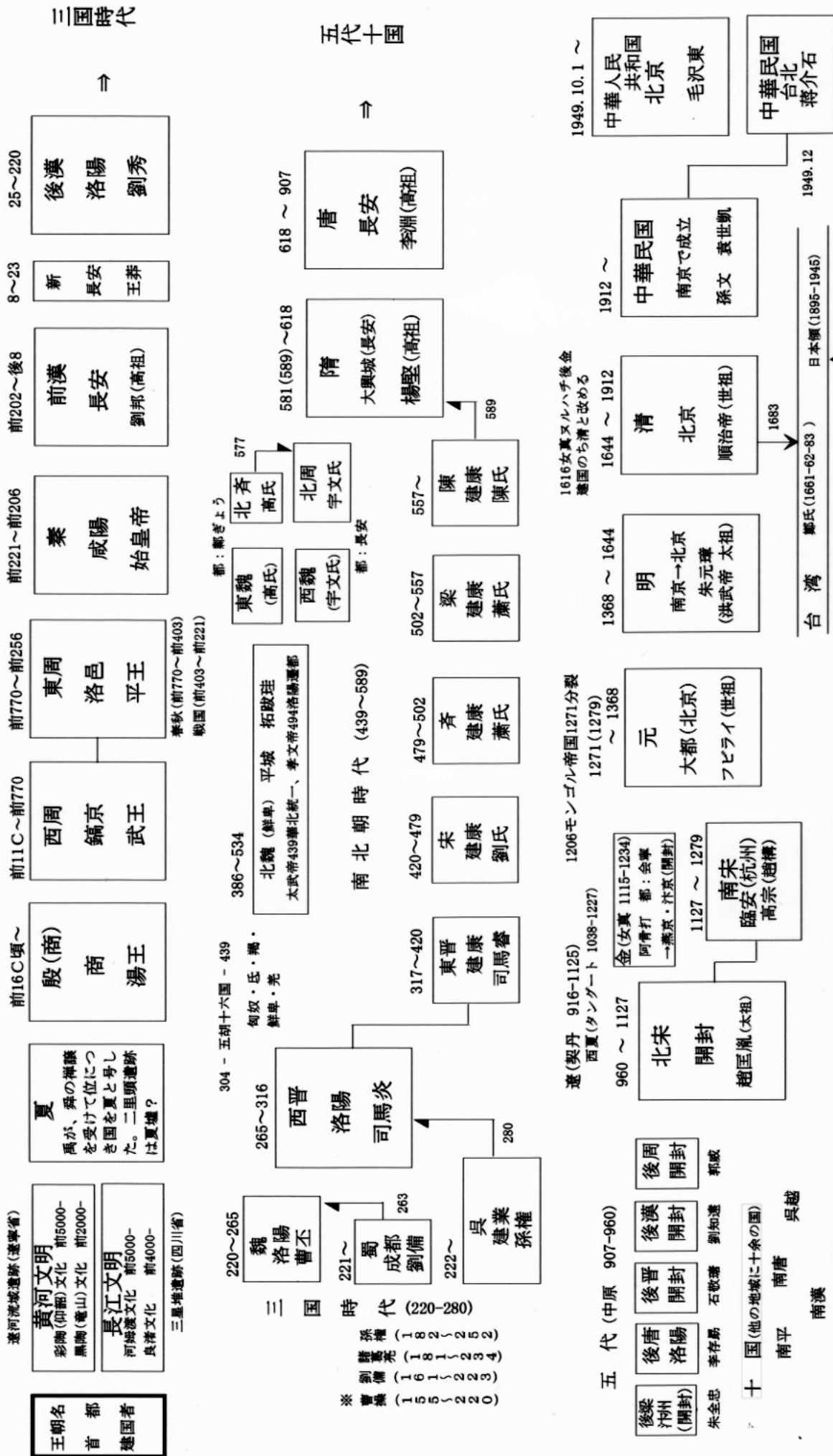
科挙/隋唐時代にもおこなわれたが、宋代にいたって完成。

表の見方及び凡例

1. 基本は、左を倒して右の政権が誕生
2. A — B AとBには、運都など継続性あり

中国史概観

3. A — B AはBに吸収
4. A —> B AはBを支配



■補注：中原(ちゅうげん)

中国文化の発源たる黄河中流の南北の地域、すなわち河南および山東・山西の大部と河北・陝西の一部の地域
「中原に鹿を逐う(覇権、逐鹿)」 中原を天下、鹿を帝位にたとえている(覇を競うこと)

陳舜臣さんは文化大革命をどう見ていたのでしょうか？

本号第1頁にあげました『中国の歴史 近・現代篇』全13巻が、第4巻で打ちきりとなってしまう、なんとも残念です。特に、陳舜臣さんの文化大革命観は是非知りたかったのですが。

陳さんの文化大革命についての見解がちらっと見える記述をみつけましたので、ここに、紹介します。この対談については、一度、『青玉獅子香炉』の執筆動機ということで、本通信第19号で取りあげました。掲載は『新刊展望』（1969年4月号）です。（編集委員 橘雄三）

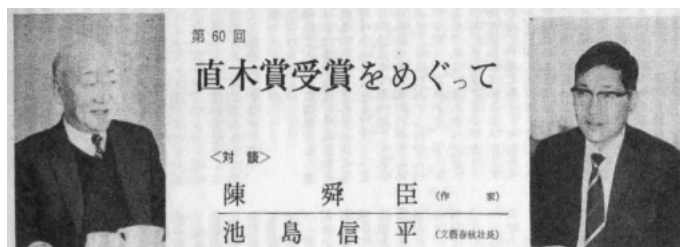
精神の改革者はロマンチスト

池島 ちよつと話題が変わるんですけど、最近の中国の文化大革命はちよつと私なんかの乏しい知識じゃ理解できないし、ただ、中国という国は非常に大きな国で、万里の長城をつくったり、思いきって儒家の書物を全部焼いてしまったり、日本人から見たらスケールも何十倍も大きい国だから、ああいうことも起こり得るということも言えるが、…。（中略）あ

あいうちよつとわれわれの理解に絶する大きな変革というか、実験をいまやっている。いったいこれはどういうことなのか、中国の歴史にこのような例があったんですか。

陳 いまおっしゃった秦の始皇帝の変革もその一つでしょうね。それから下がって前漢と後漢の間の王莽の篡奪のときも、やはりそういうような人間の精神の改造を志したようなところがありましたね。（中略）百年ほど前の太平天国のときもそれをやったと思うんです。

だから、ああいうことをやった人は、私は秦の始皇帝にしろ、王莽にしろ、あるいは太平天国の洪秀全にしろ、ロマンチスト



壁新聞なんかが日本の新聞に翻訳されてるんですが、あれは誤訳ではないんですけども、ことばのニュアンスが日本と中国ではちよつと違うんですね。たとえば「だれかを焼き殺せ」ということばが、そのまま日本語になると非常に強く感じられますが、「殺」というのは意味を強めるだけのことなんです。これは日本に輸入されたことばで「黙殺」とか「悩殺」とか、血のにおいがありませんよ。中国の殺すということばは意味を強めるだけで、血のにおいのないことばになってるんですね。ところが、壁新聞で「焼き殺せ」というと、日本人には非常に強く感じるんです。これは中国人は非常に気安く使うことばなんです、それほど強い意味では向こうでとられてないと思うんですね。（中略）だから文化大革命のことばも必ずしも正確には伝わっていないような感じですね。



中国の「焼殺」の「殺」は意味を強めるだけで、血のにおいのないことば！？

文化大革命では、劉少奇、彭徳懷など実権派（走資派）と称される人たちだけでなく、老舎のような作家、そして一般の市民までが紅衛兵による攻撃のターゲットとなり、その糾弾・暴行で、多くの人が傷害を受け、また、命を落としました。

陳さんは、文化大革命のような例として、中国史上の始皇帝の変革、王莽の「新」、洪秀全の「太平天国」をあげ、当事者三人を、「人間の精神の改造を志したロマンチスト」と、むしろ肯定的に評価し、毛沢東についても、また、同じ文脈で話されていま

す。不思議です。

さらに、談話の中で、「焼殺」を「黙殺」「悩殺」と同じ用例とし、「中国の殺すということばは意味を強めるだけで、血のにおいのないことば」とおっしゃっています。また、『日本人と中国人』でも「愁殺」「笑殺」「罵（マ ののしる）殺」という語をあげ、同じ論法で述べています。しかし、「殺」の前に置く語が問題です。手もとの中日辞典で「焼殺」を引くと「焼殺…」が載っていて、「家を焼き払い、人を殺し、…」と訳がついています。確かに、魔女の火あぶりのような事ではないですが…。

陳さんの、文化大革命に対する認識の甘さはどこからきているのでしょうか。

